

杜牧における「甘露の変」：李甘・李中敏との交流を通して

著者	高橋 未来
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	60
ページ	56-68
発行年	2002-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00150372

杜牧における「甘露の変」

——李甘・李中敏との交流を通して——

高橋 未来

一、前言

杜牧の長篇五言排律詩「昔事文皇帝三十二韻」〔樊川文集〕卷二。以下巻数のみ記す。文宗大和九年（835）春から夏にかけての短期間、杜牧が朝廷に勤務した体験を、凡そ十年後に唯一杜牧自身の体験として回想した詩である。筆者は以前、睦州刺史の生活を嫌悪していた杜牧が自薦の意図のもとに、自身の修辭的力量を示すべく、この長篇の排律を著したと指摘した。詩中では、大和九年当時に懐いていた政治参加への情熱と、にも拘わらず腐敗した政治状況下にあつてそれを發揮し得なかつた葛藤とを描き、明主の下にある今こそは志を發揮できる時期だと詠じている。この内容からも、杜牧が長い沈黙を破り自薦詩を制作した意図が読みとれると指摘した。

本稿では、更に一步を進め、杜牧が多くを語らなかつた

大和九年の朝廷勤務及び「甘露の変」を、実際にはどの様に感じていたのか、それは杜牧にとつて如何なる意味を持つ体験だったのか、という問題について考察したい。

『樊川文集』には、そのことへの言及は八作品に見える。「昔事文皇帝三十二韻」以外では、鄭注・李訓への批判的言及が、墓誌銘三篇及び一首に見える。また、鄭注への抗議によつて左遷された友人李甘・李中敏を詠じる「李甘詩」（卷二）、「李和鼎」（卷二）、「李給事」（卷二）の三首に、間接的な表現が見られる。

これまでの研究では、杜牧の「甘露の変」に対する態度は、以上の数首に関する宋・葛立方「韻語陽秋」の批評を踏まえ、「杜牧は宦官を批判したか否か」という視点を中心に論ぜられてきた。しかし未だに定説と見なされるものはない。

ところで、この三首は友人と杜牧自身とがどの様に描か

れているのかという、いわば基本的な点から再検討することによって、杜牧の「甘露の変」に対する別の見方が明らかになるのではないかと考える。そこには「昔事文皇帝三十二韻」には描かれていなかった、杜牧流の抗議の態度や理念が表されているのである。以下に、実際の作品を通して検討してゆきたい。

二、杜牧与李甘・李中敏との交流

始めに、杜牧与李甘（？～838、字は和鼎）、李中敏（生卒年未詳、字は藏之）との交流及び「甘露の変」との関わりについて確認しておきたい。

『新唐書』には、この三者について次の記述が見える。

少与李甘、李中敏、宋祁善。其通古今、善处成敗、甘等不及也。
（卷百六十六杜牧伝）

少くして李甘、李中敏、宋祁と善し。其の古今に通じ、成敗に善処すること、甘等及ばざるなり。

性剛峭、与杜牧、李甘善。其文辞气節大抵相上下。

（卷百十八李中敏伝）

性は剛峭にして、杜牧、李甘と善し。其の文辞の気節は大抵相い上下す。

右の記事に拠れば、杜牧与李甘、李中敏の三者は、剛直

な性格と節義ある詩文の作風とが似通った、親友同士だったようである。

李甘と杜牧とは、大和二年（838）に杜牧が進士科及び賢良方正能直言極諫科に合格した際の、制科における同期及第者である。唐・趙璘撰『因話録』商部・下には、中唐期の文壇を評する条において、韓愈、柳宗元、皇甫湜等に続けて李甘の人となりと詩文とを「長慶以来、李封州甘、為文至精、獎拔公心、亦類数公。甘出於李相国武都公門下、時以為得人。」と記されており、当時名声のある人物であったことが窺われる。一方、李中敏は、杜牧が仕官後間もなく江西觀察使の幕府に勤務した際（大和二年十月～大和四年九月頃）の同僚であった。

大和八年（834）に旱魃（⁷）が起きた際、司門員外郎にあつた李中敏は、「王守澄と鄭注とによって貶められた宰相宋申錫の無実を晴らすべく、鄭注を処罰すれば、旱魃は収まる」との苛烈な上疏を行った。その内容について、『新唐書』李中敏伝には次の様に記す。

「…宋申錫位宰相、生平饌致一不受、其道勤正。姦人忌之、陷不測之辜、獄不參驗、銜恨而没、天下士皆指目鄭注。臣知数冤必列訴上帝、天之降災、殆有由然。」

（略）況申錫之枉、天下知之。何惜斬一注以快忠臣之

魂、則天且雨矣。」帝不省。中敏以病告滿、帰潁陽。

「……宋申錫宰相に位するも、生平饋致は一も受けず、其の道は勁正なり。姦人之を忌み、不測の幸に陥れられ、獄して参驗せられず、恨みを銜みて没すれば、天下の士皆な鄭注を指目す。臣は数冤必ず列ねて上帝に訴えられ、天の降災、殆ど由りて然ること有るを知る。(略) 況んや申錫の枉、天下之を知る。何ぞ一の注を斬りて以て忠臣の魂を快くせば、則ち天且に雨ふらんとするを惜しまん。」と。帝省みず。中敏病を以て滿を告し、潁陽に帰る。

右の記事に拠れば、李中敏のこの上疏は聞き入れられなかったため、病と称し満期を申し出て帰郷したという。

大和九年春、杜牧は監察御史として、淮南節度使の幕府から朝廷に勤務した。その際李甘は侍御史として勤務しており、御史台における杜牧の上司という関係となった。そこで七月に、李甘の貶謫事件が起きた。その経緯を、『新唐書』卷百十八李甘伝には次の様に記す。

鄭注侍講禁中、求宰相、朝廷譁言將用之。甘頤倡曰「宰相代天治物者、当先德望、後文芸。注何人、欲得宰相。白麻出、我必壞之。」既而麻出、乃以趙儋為鄜坊節度使。甘坐輕肆、貶封州司馬。

鄭注禁中に侍講するに、宰相を求め、朝廷將に之を用いんとすと譁言す。甘頤らかに倡えて曰く「宰相は天に代わりて物を治むる者なれば、当に德望を先にして、文芸を後にすべし。注何人にして、宰相を得んと欲する。白麻出づれば、我必ず之を壞らん。」と。既にして麻出づるや、乃ち趙儋を以て鄜坊節度使と為す。甘は輕肆に坐して、封州司馬に貶せらる。

この記事に拠ると、李甘は鄭注の宰相就任の噂を聞き、「それを記した詔書を破り捨てる」と反対を高らかに唱えた。ところが實際の詔勅は異なるものであり、李甘は「輕肆」として封州司馬（現在の広東省封川県）に左遷されたという。その一連の事件を側面で体験した杜牧は、病氣を理由に洛陽へ転任したのであった。

その洛陽で杜牧は、帰郷していた李中敏と再会し、再び交流を持つようになった。そして共に、「甘露の変」勃発の報せを知ったのである。

「甘露の変」後、李中敏は朝廷に復歸する。だが、給事中の在任中に宦官仇士良に抗議したために、辞職し帰郷することとなった。しかしその後、婺州、杭州の刺史となり、その間杜牧は李中敏の二度にわたる抗議行動を「李給事」二首に詠じた。

一方の李甘は、それから四年後の開成四年（839）に、復職すること無く封州で死去した。この時杜牧は同年春から左補闕（史館修撰を兼任）として大和九年以来の朝廷勤務にあり、そこで追悼の意を込めて「李甘詩」と「李和鼎」とを詠じたのであった。

三、「李給事」其一について

まず、李中敏を詠じた「李給事」二首のうち、鄭注・李訓への抗議を詠じた第一首を以下に挙げる。

一章緘拜皂囊中 一章 緘拜す 皂囊そうのうの中

慄慄朝廷有古風 慄慄として朝廷に古風有り

元礼去帰緱氏学 元礼 去りて帰る 緱氏の学

〔原注〕李膺退罷、緱緱氏教授生徒、給事論鄭注、告滿帰潁陽（李膺退罷し、緱氏に帰りて生徒を教授す、給事鄭注を論じ、滿を告して潁陽に帰る）

江充来見犬台宮 江充 来りて見ゆ 犬台宮

〔原注〕鄭注對於浴室（鄭注 浴室に對す）

紛紜白昼驚千古 紛紜 白昼 千古を驚かし

鈇鎖朱殷幾一空 鈇鎖 朱殷 一空に幾し

曲突徙薪人不会 曲突 薪を徙すも 人 会されず

海辺今作釣魚翁 海辺 今 釣魚の翁と作る

首聯では、「李中敏は一篇の上疏文を皂囊（上疏文を入れる黒い帛の袋）に入れて奉じた。それは周囲を戦慄させる氣迫で、朝廷に古の直言の士たる氣風があった」と、鄭注彈劾の緊迫した様子を詠じる。しかしその上疏は聞き入れられなかったために、頤聯では「後漢の李膺が緱氏に帰郷して、門下生を教授したように、李中敏は潁陽へ帰郷した。それに代わり前漢の江充が犬台宮にて武帝に信任を得たように、鄭注は浴室殿の門で文宗に信任を得た」という。ここに、李中敏を李膺に比してその清官ぶりを称えると同時に、その上疏を採用しなかったが為に文宗は誤って小人物を近づけることになった、とする杜牧の見方が窺われる。

次いで第六句の「鈇鎖」は、斧と台（人を斬るのに体を取せる）との称。「朱殷」は赤黒い色のこと。頤聯では、「甘露の変」当日の様子を「官僚達が騒ぎ乱れた白昼のこと、遠い後世までをも驚愕させる事件が起き、禁軍の振るう斧は、余すところ無く血に染まった」と述べる。これは、杜牧の詩文中における、「甘露の変」勃発当日について、唯一言及されたものである。禁軍によって朝廷の官僚達が逃げ惑い惨殺された惨状が、抽象的だがかえって鮮烈な印象を与える表現となっている。

第七句「曲突徙薪」は、災害を未然に防ぐことの喩え。¹⁵これを踏まえて尾聯では「李中敏は災いの元凶たる鄭注を弾劾したのに、その功績を認められず、それどころか却つて朝廷から遠くで釣りをする閑雅な身にされているとは」とその境遇を歎き、李中敏への正当な評価を訴えて詩を結ぶ。

詩中では、果敢に鄭注を弾劾した李中敏を、古の直言の士に喩えて称揚し、一方ではそれに反して不遇な境遇にあるとの同情を寄せる。また、賢士の諷諫を採用しなかったことが遠因となり「甘露の変」の惨事に結びついたという、杜牧の認識も窺える。身近な友人の事件であるにも拘わらず、「甘露の変」を歴史上の一事件として客観視する、杜牧の冷静な視点をも、併せて窺うことができる。

四、「李甘詩」について

次に、李甘を詠じた「李甘詩」・「李和鼎」の二首における、李甘と杜牧自身との描かれ方を検討してゆきたい。五言古詩「李甘詩」には、当時の朝廷にて李甘の傍らにいた杜牧の目を通した、具体的な李甘貶謫事件の全容が記されている。

本詩は、当時の朝廷の様子から始まる。杜牧は、平和な

朝廷で、官僚達と文宗とが鄭注・李訓の悪辣さに気づかぬうちに、両者は密かに勢力を伸ばし続けて遂に絶大な権力を持つに至った、と描く。次いで、官僚達がそれを境に豹変し、鄭注・李訓に阿諛追従するようになった様子を、次の様に表す（数字は句の通し番号を示す）。

21 森森明庭士 森森たる明庭の士

22 縮縮循牆鼠 縮縮たる循牆の鼠

23 平生負名節 平生 名節を負うも

24 一旦如奴虜 一旦 奴虜の如し

25 指名為錮党 指名して錮党と為し

26 状跡誰告訴 状跡 誰か告訴せん

27 喜無李杜誅 李杜の誅無きを喜び

28 敢憚髡鉗苦 敢えて髡鉗の苦を憚る

名君が治める朝廷で威厳のあつた官僚達は、怯えて壁沿いを走る鼠の様になった。それまで奇骨あると評判だった官僚は、一瞬にして鄭注・李訓の奴隸の如くになってしまった。官僚達は互いに朋党と誣告しあい、陥れられた者の無実を訴えて庇う者などいない。むしろ彼らは擁護しないことで、後漢の李膺と杜密の様に宦官勢力に抗つたため「朋党」として処罰されることがないの喜び、刑罰の苦しみを避けようとした、という。¹⁷

この様に豹変した同僚の中であって、李甘の抗議行動は如何なるものであったか。以下には、李甘が抗議を決議し、それを杜牧に告げる様子、そしてその結果左遷される顛末が描かれる。

33 予時与和鼎 予 時に和鼎と

34 官斑各持斧 官斑 各おの持斧す

35 和鼎顧予云 和鼎 予を顧みて云く

36 我死有处所 我が死 处所有り

37 当廷裂詔書 廷に当たりて詔書を裂き

38 退立須鼎俎 退立して鼎俎を須たんと

「私は死に処を得た。明日朝廷で、鄭注の宰相就任が記された詔勅を破り捨て、その後は刑が下るのを待つつもりだ」と、李甘は死刑すら覚悟して抗議する決意を、杜牧に告げていたのである。これに対して杜牧がどう応答したのか——制止しようとしたのか或いは励ましたのか——については述べられていない。

ところが翌朝の朝廷では、鄭注の宰相就任とは無関係の詔勅が出された。杜牧はその詔勅を見て、41・42句「儼雅千官容、勃鬱吾累怒」（儼雅たり千官の容、勃鬱たり吾が累怒）と、厳かな面持ちの官僚達の中で、一人怒りが沸き起こるのを感じたと述べる。しかしそれによって、李甘の援

護や抗議といった直接的な行動を取るまでには至らなかった。そして次の日、李甘左遷の詔が下る。

以下の箇所には、李甘が左遷先へと赴く様子が、屈原のイメージと重ね合わせて描かれている。

47 夜登青泥坂 夜 青泥坂に登るに

48 墜車傷左股 墜車 左股を傷なう

49 病妻尚在牀 病妻 尚お牀に在り

50 稚子初離乳 稚子 初めて離乳す

51 幽蘭思楚沢 幽蘭 楚沢を思い

52 恨水啼湘渚 恨水 湘渚に啼く

53 怳怳三閭魂 怳怳たり 三閭の魂

54 悠悠一千古 悠悠たり 一千古

第47句は、蜀の地へのルートにある青泥嶺のイメージを用いて、「李甘は急ぎ厳しい旅の途に就いた」という。第48句「墜車」は、清・馮集梧注『樊川詩集注』の引くように「莊子」達生篇の「醉者之墜車、雖疾不死。骨節与人同而犯害与人異、其神全也。」（醉者の車より墜つるや、疾むと雖も死せず。骨節人と同じくして犯害人と異なるは、其の神全ければなり）を踏まえる。「傷左股」は、『周易』明夷篇の「夷于左股。用拯馬壯、吉。」（左股を夷る。用て拯うに馬壯なれば、吉なり）であり、傷の程度が比較的軽いので、速

やかに去れば禍を避けられるとの意。即ち「李甘は動じない精神を持っているので、この憂き目も大きな痛手とならず好転しよう」との意であろう。しかし李甘の妻は病床にあり、子供はまだ幼いという辛い状況にある。杜牧は道中の李甘の様子を51〜54句で「ひっそりと咲く蘭に屈原の彷徨った楚の沼沢を思い浮かべ、湘江のほとりに来ては屈原の投身した恨みを思つて泣いた。茫然自失の李甘の思ひは、遙か昔の屈原の無念を再現したものだつた」と表す。次いで場面は一転し、「甘露の変」後から現在に至る政治状況と、杜牧自身の心情とが、以下の様に述べられる。

55 其冬二兇敗 其の冬 二兇敗れ

56 渙汗開湯苦 渙汗 湯苦を開く

57 賢者須喪亡 賢者 喪亡を須ち

58 讒人尚堆堵 讒人 尚お堆堵す

59 予於後四年 予 後四年に於いて

60 諫官事明主 諫官 明主に事う

61 常欲雪幽冤 常に幽冤を雪ぎ

62 於時一裨補 時に於いて一に裨補せんと欲す

63 拜章豈艱難 拜章 豈に艱難ならんや

64 胆薄多憂懼 胆薄く 憂懼多し

その年の冬、「二兇」と称すべき鄭注・李訓が「甘露の

変」で誅殺されると、刑罰の緩やかな時代となつた¹⁹。しかし尚おも賢人は滅亡の危機にあり、讒人は依然として大勢にいる、という。杜牧はこの不安定な政情の中で再び朝廷勤務にあり、「常に冤罪を晴らし、ただひたすら時政を補佐したいと思つている、上疏も難しいことがあるか」と懸命に仕えんとする志を述べる。しかしそうした抱負を述べる一方で、63・64句では、自分は勇気が無く心配事が多いとも述べている。これは、自分には李甘の冤罪を晴らす自信が無いということであろう。杜牧は親友に対し、率直な思いを吐露するのである。

そして詩の最後には、李甘を屈原に、自身を賈誼に擬えて、李甘への哀悼の思いを詠じる。

65 如何干斗氣 如何ぞ干斗の氣

66 竟作炎荒土 竟に炎荒の土と作る

67 題此涕滋筆 此を題して涕もて筆を滋おし

68 以代投湘賦 以て投湘賦に代えん

何故君の天まで貫く氣は、南の果ての地に還つてしまつたのだ。私はこの詩を作り涙で筆を濡らして、賈誼が屈原を弔つて投じたという「投湘賦」に代えよう、という。

一詩全体を眺めると、前半では杜牧の目を通した当時の朝廷の様子、李甘の貶謫事件の一部始終を描いている。そ

して後半では、貶謫先へ赴く李甘を、不遇な賢人たる屈原のイメージを重ね合わせて描く。この後半部分の描き方は、追悼詩の類型的表現といえよう。しかし、それを踏まえた上でもなお、杜牧の李甘に寄せる友情、賞賛が窺われる。杜牧は李甘の側に立った直接的な援護行動は取らなかった。しかしずっと李甘の傍にいて行動し、李甘貶謫の命令にも憤りを感じたと記す。杜牧の理念はまさに李甘の側にあったということが分かるであろう。

五、「李和鼎」について

次に、「李和鼎」詩を見てみたい。七言絶句の本詩は、叙述的描写の「李甘詩」と異なり、寓意を用いて李甘の冤罪を訴える。また以上の二首と同様に、李甘を古人の気風を継ぐ賢士として称揚し、その不遇に対する同情を詠じる。

鵬鳥飛來庚子直	鵬鳥	飛び来りて	庚子直 <small>あた</small>
謫去日触辛卯年	謫去	日は触す	辛卯の年
由来枉死賢才事	由来	枉死は賢才の事	
消長相持勢自然	消長	相持す	勢い自然なり

第一句は、賈誼「鵬鳥賦」の「庚子日斜、服集予舍」（庚子の日斜めなるとき、服予が舍に集る）を典故として

「鵬鳥が賈誼の長沙の舍に飛来したのは、庚子の日だった」と述べる。長沙の地に、李甘左遷の地である封州を重ね合わせて、李甘に災いが降りかかったことを喩えている。

第二句は、「詩経」小雅・十月之交の「朔日辛卯、日有蝕之、亦孔之醜」（朔日辛卯、日の之を蝕する有り、亦た孔だ之醜む）を典故とする。鄭箋に「陰侵陽、臣侵君之象。日辰之義、日為君、辰為臣。辛、金也。卯、木也。又以卯侵辛、故甚惡也。」（陰の陽を侵すは、臣の君を侵すの象。日辰の義は、日を君と為し、辰を臣と為す。辛は、金なり。卯は、木なり。又卯を以て辛を侵す、故に甚だ悪なり）とあるのを踏まえれば、「李甘が貶謫の憂き目にあったのは、臣下の鄭注・李訓が文宗を侵した年だった」との意であろう。

後半二句は、「古より無実の罪で非業の死を遂げるのは、李甘の如き賢人の常である。小人と賢人との盛衰は拮抗するもので、人間の力では如何ともし難いのだ」と欺じて結ぶ。「李甘詩」と異なり李甘個人に即した具体的な言及が無く、むしろ親友を完全に対象化して一人の不遇な賢士像を詠じた詩といえよう。

以上の二首の「李甘詩」及び「李和鼎」は、恐らく連動する意識のもとで詠じられたのではないかと考えられる。つまり、杜牧は李甘の抗議行動に対する敬意と、冤罪を晴

らされぬまま死去した境遇への同情、義憤を感じていた。そこで「李甘詩」にて、阿諛追従する同僚達の中で一人果敢に抗議を行った李甘の勇姿を描き、しかし李甘の冤罪を晴らす自信が無いと不安を吐露した。恐らくそれ故に杜牧は、「李和鼎」の詩で、寓意を用いて李甘の冤罪を詠じたのではなからうか。

六、友人への思いと杜牧の自負と

ところで「李甘詩」には、詩制作時点の杜牧の心情を表すのに比べて、李甘左遷当時の杜牧の姿が、僅かにしか見出せない。また李甘の決意に対する杜牧の反応、つまり杜牧の認識も記されていない。杜牧は李甘の決意を聞いて、翌日李甘が抗議を執行する場に行ったという、一連の行動が記されるのみである。しかしその記述から、杜牧が常に李甘の傍らにいて共に事件を体験したことが分かり、両者の深い友情が窺われる。この気骨ある者と友人であるという点、そして李甘の抗議の決意を聞いてから貶謫の命令が下るまでずっと側で見守るという行動。それは、杜牧の一種の意思表明である。そして、それを記すところに杜牧の自負が表されているのではなからうか。

杜牧が詩中で李甘・李中敏の行動を称えるのは、つまり

杜牧の彼らへの共感を示すことでもある。それ自体に、杜牧の「周囲の情けない同僚とは違い、自分は友人に共感する、友人側の人間である」という自負が表されている。

もともと杜牧は李甘の左遷に際し、援護などの直接的な行動は取らず、病氣と称して中央勤務から退いた。この行為は、李甘・李中敏の直言による抗議と比較した場合、消極的な身の処し方に思われる。しかしそれは、李甘等と違う、杜牧流の態度の示し方ではなかったか。

というのも、杜牧は幼少の頃より歴史に精通していた。それは「李給事」其一に示される、「甘露の変」への冷静な視点からも窺えよう。それ故に、古来より直言による諷諫を行ったための不遇な結末について、杜牧は熟知していたであろう。前掲「新唐書」杜牧伝に「少与李甘、李中敏、宋祁善。其通古今、善处成败、甘等不及也。」と記す通りである。また「与人論諫書」（卷十二）では、直諫が皇帝に氣に入られなかった歴史上の例を挙げ、婉曲な諷諫こそ効果があると述べている。従って、李甘・李中敏の直言に対しても、共感しこそすれ冷静に対処していた面もあったのではないかと考えるのである。

しかし、大和九年の朝廷勤務、そこで体験した友人の左遷、それに続く「甘露の変」という一連の事件に際して、

杜牧は平然としていた訳ではない。それらは杜牧にとって、大きな衝撃を与えた体験であった。

それは朝廷勤務を境として、それ以前の地方幕府任官期から洛陽転任以後の作品における、二点の変化から推測される。一つは、洛陽以後の作品に、杜牧の精神的衰弱を示す如くに「嘆老」が詠じられるようになり、また再びの中央勤務に対する不安が多く詠じられる点である。もう一つは、幕職官の時期に制作した「罪言」、「原十六衛」等の国策を論ずる上奏文を、洛陽転任以後は政治意欲が減退したかの如く、暫くの間著さなかつたという点である。

その衝撃ゆえか、杜牧は洛陽転任から李甘死去までの四年間沈黙し続け、李甘が死去した際に初めて當時を語った。しかしそれ以後は再び、「李給事」、「昔事文皇帝三十二韻」という僅かな言及を残すのみであった。言及の少なさは、杜牧が積極的には語りたくなかつたことを示しているよう。

七、結語

以上、杜牧の友人李甘・李中敏との交流を通して、杜牧の人生における「甘露の変」の意味について検討した。友人を詠じる三首の詩には、友人の果敢な抗議行動に対す

る称賛と、その後の不遇な境遇に対する同情、正当な評価を望む思いとが表されていた。そこにはまた、鄭注・李訓と周圜の阿諛追従する同僚への批判も記されていた。一方で親友を相対化し、また「甘露の変」を歴史上の一事件として描くという、杜牧の客観的な視点も窺われる。

杜牧は「甘露の変」に際して、李甘・李中敏の様に直接的な抗議の態度を示しはしなかつた。むしろ病と称して難を避け、長らく沈黙を続けていた。しかし李甘・李中敏を詠じた詩から、杜牧の理念は彼らの側にあること、また「自分は情けない同僚達とは違い、李甘・李中敏を友とする側の人間である」という自負、杜牧流の抗議の態度が窺えるのではなからうか。

注

本稿で引用する杜牧詩文の底本は、『樊川文集』（陳允吉校点、上海古籍出版社、一九七八年九月）を用いた。

(1) 「杜牧「昔事文皇帝三十二韻」について―その制作意図をめぐって―」（中国文化学会『中国文文化―研究と教育―』第59号、二〇〇一年六月）。

(2) 大中三年制作の「唐故太子少師奇章郡開国公贈太尉牛公墓誌銘」（卷七）、大中六年の「唐故東川節度使檢校右僕射兼御史大夫贈司徒周公墓誌銘」（卷七）、「唐故淮南支使試大理評事兼

監察御史杜君墓誌銘」(卷九)。及び開成二年(胡可先「杜牧研究叢稿」人民文学出版社、一九九三年九月の九十二頁参照)の「杜秋娘詩」(卷二)。尚お、最晩年である大中六年の墓誌銘にも両者への批判が記されることから、杜牧は終生両者に批判的であつたといえよう。

(3) 寇養厚「杜牧詩思想与芸術述論」(『西北師院学報』一九八三年第四期)、詹滿江「甘露の変と詩人たち——李商隠を中心として」(『日本中国学会報』第三十七集、一九八五年十月所収)、葛曉音「杜牧和他的詩歌」(『漢唐文学的嬗変』北京大学出版社、一九九〇年十一月所収)、郭其云「剛直奇節見風骨——從杜牧對「甘露之變」的態度看他的人品」(『桂海論叢』一九九六年第四期)、胡河先「甘露之變：中晚唐政治与文学的交会点」(『中唐政治与文学——以永貞革新為研究中心』安徽大学出版社、二〇〇〇年十月所収) 他。

(4) 卷九に「杜牧之贈甘詩云」(略)、又有贈中敏詩云「(略)」蓋深痛一公之言不行、而訓注得恣其謀也。蓋當時、仇士良竊國柄、勢焰薰灼、士大夫於議論之間、不敢以訓注為是、以賈殺身之禍、故牧之詩如此。」とあり、また卷十一に「杜牧之詩云「昔事文皇帝(略)到口却成吞」至与人論諫尤可怪。謂「諫殺人者殺人愈多、諫收獫者收獫愈甚。是欲箝天下忠義之口、有臣如牧、國家奚望哉。然唐史乃謂「牧之剛直有奇節、敢論列大事、指陳利病尤切」何邪。」とある。

(5) 『冊府元龜』卷六四四・實華部考試二の和大二年の条に「第四等南卓、李甘、杜牧」とある。

(6) 『新唐書』李中敏伝に「沈佺期觀察江西、辟為判官。」とある。

(7) 新旧『唐書』は大和六年に作る。『資治通鑑』は大和八年六月の条に記し、『資治通鑑考異』は「開成紀事」、「大和推兇記」が八年六月と記すのに拠るとする。ここではこの説に従う。

(8) 『旧唐書』李中敏伝は洛陽と記すが、「李給事」其一の原注に潁陽と記すのに従う。

(9) 史書と「李甘詩」の記述には異同がある。『旧唐書』文宗紀及び『資治通鑑』大和九年七月の条は、李甘左遷の日を「癸亥」(二十日)と記し、趙儋の鄜坊節度使任命を八月甲申と記す。「李甘詩」には、李甘が抗議を決議した日を「庚午」(二十七日)と記し、翌日趙儋の鄜坊節度使任命の詔勅が出され、その翌日貶謫が決定されたと記すのに拠れば、李甘貶謫の日は「壬申」(二十九日)となる。清・馮集梧注『樊川詩集注』の「李甘詩」題下注は、「李甘詩」の記述を是と判断しており、ここではこれに従う。

(10) 『唐故平盧軍節度巡官隴西李府君墓誌銘』(卷九)に「大和九年、為監察御史、分司東都、今諫議大夫李中敏(略)咸言於某」とある。

(11) 『新唐書』李中敏伝に「仇士良以開府階陰其子、中敏曰「内謁者監安得有子」士良慙然、繇是復棄官去。開成末、為婺、杭州二州刺史、卒于官。」とある。『資治通鑑』は開成五年十一月の条に記すが、帰郷したとの記事がなく、李德裕が李中敏を厭い婺州刺史に左遷したと記している。岑仲勉・陳達超整理『通

鑑隋唐紀比事實疑」(中華書局、一九七七年八月)「李中敏與德裕」の条では、『通鑑』に記す時期と李德裕との関連とを疑問とする。但し李中敏の給事中任官は、諫議大夫任官の後であり、宋・王溥撰『唐会要』卷五十五・匭の条に「開成三年八月、諫議大夫知匭使事李中敏奏」とあるのに拠れば、早くとも開成三年八月以降となる。

(12) 制作時期を、朱碧蓮選注『杜牧選集』(上海古籍出版社、一九九五年五月)、周錫麒選注『杜牧詩選』(遠流出版公司、一九八八年七月)は、開成未頃とするが、郭文錦「杜牧詩文繫年小筭」(『人文雜誌』一九八九年第五期)は『新唐書』の記述を誤りとした上で、會昌五年の作と推論しており、一定しない。

(13) 『後漢書』李膺伝に「以公事免官、還居緇氏、教授常千人。」とある。「緇氏」は李膺の故鄉潁川郡の属。馮集梧注の引く宋・彭叔夏撰『文苑英華弁証』事証の条には、詩中の「緇氏」は誤りと記す。

(14) 江充は、漢の武帝時代に巫蠱の獄で太子劉據を貶め、後に誅殺された人物。『漢書』江充列伝に「初、充召見犬台宮、(略)充為人魁岸、容貌甚壯。帝望見而異之。」とある。鄭注は『旧唐書』鄭注伝に「注進藥方一卷、令守澄召注对浴室門、賜錦綵。」とある。鄭注を江充に譬える表現は、注2所掲「杜秋娘詩」にも「一尺桐偶人、江充知自欺」(一尺の桐偶人、江充自ら欺くを知る)とある。

(15) 『淮南子』説山訓、後漢・桓譚撰『新論』見微篇に、戦国時代の弁説家・淳于髡の逸話が見え、『漢書』霍光伝にも同じ内

容が見える。

(16) 馮集梧注が二例挙げるうち、後漢の李固・杜喬の称ではなく、党錫の禁との関係を踏まえて李膺・杜密の称と解す。

(17) この様に禁軍と役所の官僚とが豹変して、阿諛追従するようになった姿は、「昔事文皇帝三十二韻」にも描かれている。更に「森森明庭士 縮縮循牆鼠(李甘詩)」と「馥馥芝蘭圃 森森棘棘藩(昔詩)」という類似した表現も見えることから、杜牧の同僚及び鄭注・李訓に対する認識は、二首制作の間の数年間を経ても一貫していたことが分かる。

(18) 注者不明の朝鮮刻本『樊川文集夾注』は、『元和郡県図志』の青泥嶺(山南道興州長拳県)の一節を引く(原文は字の異同あり)。一方、馮集梧注は、同書の京兆府藍田県の一節「鼎理城、即峽柳城也、俗亦謂之青泥城」を引き、青泥嶺ではないと記す。李甘が赴く嶺南道への経路に合わないとはしたのであろう。この様に、実際に李甘が蘭田の青泥城にて何らかの傷をおったことを詠じたとする解釈もある。

(19) 注3所掲論文その他、杜牧の宦官への態度を論じる諸論では、この句が「甘露の変」後政權を掌握した宦官勢力におもねった表現かどうかが議論されている。ここでは「鄭注・李訓の過酷な刑法が、皇帝の善政にとつて替わった」と解す。

(20) 注3所掲葛論文にも言及がなされている。

(21) 青木孝子「杜牧の嘆老意識とその表現——『流年』、『白髮』の語を通して——」(鎌田正博士八十寿記念漢文学論集)大修館書店、一九九一年一月所収)参照。

(22) 次の制作は、会昌三年(843)に宰相李德裕に宛てた「上李司徒相公論用兵書」(卷十二)。但し杜牧は、その間にも引き立てを求める書簡を高官に送っており、政治意欲を完全に失ったとの意味ではない。

(筑波大学大学院)